

ので、もしかしたら第一志望が不合格だったのかもしれない。でも、まあ、子は二つの大学？にみごと合格したのだ。名のみで春で、まだ寒いけれど、さあ眠ろう・この結句の力の抜け具合がいい。

66 マトリョーシカ分ちて終つひに現はるる

虚うつろをもたない小ちさき人形 松岡秀明

「人」は多面体だと思っていたが、なるほどマトリョーシカの喩えの方が的確かもしれない。なぜなら最後に「虚うつろをもたない小ちさき人形」が出てくるからだ。普通に考えるとそれはアイデンティティーのように思うが、作者は精神科医なので、もつと別ものを暗示しているように思う。心の襞を、マトリョーシカを一体ずつ外していくように取り除いていくと現れる「小ちさき人形」とはどんな顔をしているのだろう。きつと、泣きじやくつていたり歯を食いしばっていたりするのだろうか。パンドラの箱から最後に出てきたのは「希望」なのだが。

67 タッチアップなど分かつているのか神宮で原を覗いている君のまばたき

黒岩剛仁

タッチアップなど、分かつてても分からなくてどちらでもいいのだ。大切なのは、

今ふたりが並んで野球を覗いているということ。ただ、作者は誘った責任上、ルールがわかっている存分楽しんでくれているかと気遣う。でも、それはおそらく杞憂である。今、目の前で、あの、原がプレーしているのだ。それだけで十分ワクワク感はある。相手のピッチャーが荒木であったなら、もう言うことなし！余談だが、当時はルールが全く分からなかったラグビーを覗に行ったことがあったが、とても楽しかった。

68 わが仕事この酔ひし人を安全に送り届けて忘れられること 高山邦男

何と潔く清々しいのだろう。タクシーの運転手としてのサービスをきっちり提供し、

そのあと忘れられるまでが仕事だという。酔った客の中には、タクシー運転手の匿名性ゆえ、聞いてもないことを勝手に話し始める客も多いだろう。時には耳を塞ぎたくないような話もあるだろう。なかなか言えない思いを、人はそれぞれ抱えている。客が吐き出した思いをすべてこの作者は肯定し、受け止め、そして忘れてくれればよいという。都会の孤独と優しさがこの一首には凝縮されている。

69 文明がひとつ滅びる物語しつつかまえるの翹脱がせゆく 谷岡亜紀

かるた取りなら人気ナンバーワンの札になるだろう。スケールの大きさ、滅びの美学、品の良いエロティシズム。まるで英雄の情事を覗くような感触がある。そしてそれらは全て、物語の要素として好まれるものばかりだ。男はおそらく、自分が語る壮大な物語に酔っている。文明が滅びる物語は、その華々しい活躍ゆえに壮絶な最期を遂げる英雄譚に似ている。滅びの美学には男を陶醉させる毒があるのだ。そんな毒を今、翹を脱がせたおまえに注入しようとする。この二人も破滅に向かっているのかもしれない。

70 背後とは私を包む外界の優しい方の半分なのだ 武藤義哉

はつとさせられた。ああ、そうなのか。働く以上は男性に劣らぬ責任感を持つて仕事に取り組んできたつもりだった。それなりに悪くない仕事をしてきたという多少の自負もある。でも、このように思ったことは一度もなかった。「優しい方の半分」という表現によって、あと半分の厳しさ、過酷さが強調される。男が向かっていく社会は敵が潜伏していたり荒れ狂う風が吹いていたりするのだろうか。「優しい方の半分」があつてよかった。四面楚歌になると、生きて行けない。